

ずいそう

博多祇園山笠

古川 啓吉



今年の夏は、全国各地共 30～35 度以上と近年にない猛暑が続き、皆うんざりしたものだが、それでも暑さにもめげず、有名な大きなお祭りから、村の鎮守様の素朴なお祭り、そして盆踊りと色々な夏祭りが催された事と思う。それには豊年満作、無病息災、暑気払い、楽しみ等々の庶民の諸々の願いが込められている。そしてその祭の行事の中に昔の人達の「生活の知恵」が感じられる。

私の住む福岡の博多祇園山笠は、豪華さと威勢のよいお祭りである。その山笠のルーツは、仁治2年(1241)当時流行した悪疫を追放する為、承天寺の聖一国師が祈願に施餓鬼棚に棒を付けて和尚がその上に乗り、人々が昇き回り町中に甘露水を振り撒き祈禱したのが始まりとされている。774年の歴史である。やがて博多の総鎮守櫛田神社の祭りとなったが、博多祇園山笠の昇き山は、必ず承天寺に立ち寄る習わしである。中世にも山笠が行われた記録が残っているが、太閤(秀吉)の町割り以後変遷はあったが、現在では七流が山笠を実行している。大黒流、東流、西流、土居流、恵比須流、千代流、中洲流の七流れである。流れとは、山笠の所属する町内の組織的な団体である。

山笠。これを地元の人々は単に「山」「山」と呼んで親しんでいる。「今年も、もうすぐ山ばい」と言った調子である。

前に述べた豪華さは、「飾り山」に象徴される。昔は高さ53尺(16メートル)の山をそのまま担いだが、明治時代、通りに電線が張られた為、飾り山と昇き山に分離された。「飾り山」は、これは見せる為、見る為の山であり、非常に絢爛豪華に作られて飾られており、見る人の目を楽しませてくれる。山の正面側を「表」、裏側を「見送り」と称している。表は武者等をあしらった歌舞伎調の勇壮なもの、見送りは恋物語や世話もの等の優雅なものが通常であり、それぞれの人形師が腕によりをかけ競っている。今年の一五番山の飾り山は、表は「祝博多乃連獅子」、見送りは「博多祭之七福神」であった。

しかし、最近は見送りにTVの人気番組や、マンガも多く飾られるようになった。

そして山笠の醍醐味、勇壮さは何と言っても「昇き山」である(この山にも人形が飾られている)。昇き山の台は、太い材木を釘1本使わずに組んで作られ重さは1トン近く、28人の若手や壮年の男達が、水法被とメ込みを付けて「いなう」って(かつぐ、とは言わない)大地を踏みしめると悪鬼が恐れて退散し、おまけに台上には武人の旗さし物や、いかめしい人形が

飾られ悪鬼をにらめつけているとの、昔の民俗信仰がある。

山笠の祭は、6月28日から飾り始めた飾り山が、7月1日一斉に公開される。そして14本程博多の町に立ちその絢爛さを競い合い、15日早朝迄公開される。

7月1日 夕方からは当番町のお潮井とりで、その年の当番町の人達は水法被の上に乗る。当番法被を重ね箱崎浜迄駆け足で行き、海水で身を清め、海水からお潮井(清め砂)をお潮井てぼに掬い沈む太陽に祈る。みそぎの一種である。その後、箱崎宮、そして又駆け足で櫛田神社迄行き参拝する。山笠期間中の安全の祈願とかき手達の足慣らしの為でもある。

7月9日 夕方から各流れのお潮井取り。やり方は7月1日の当番町と同じ。

7月10日 午後、流れ昇き、ここで初めて山が動く。各流れごとに自分の流れの区域を昇き回る。静(飾り山)から動(昇き山)へ、山の主役はうつる。とは言え「動」と「静」の対比もこれ又魅力である。

7月11日 朝山(午前5時頃)。祝儀山、縁起山とも言われ、朝山では、山笠に長年功績のあった長老に台上がりをしてもらい、流れ昇きを行う。

他流れ昇き(午後)、他の流れの地区まで出向いて山を昇く。相互表敬訪問と言ったところ。



- 7月12日 追山ならし（櫛田入り午後3時59分）追山ならしは、いよいよ3日後に迫った本番とほとんど同じコースを走る。いわばリハーサルである。以後各流れは5分間隔で櫛田入りした後、博多の町筋を約4キロ昇き回りゴールに向かって突進する。
- 7月13日 集団山見せ（午後3時半スタート）。昇き山が博多部から那珂川を渡り、福岡部を走るのはこの日だけ。知事、市長ら地元の知名士が台上がりするのが慣例になっている。福岡市の幹線道路を走る。この集団山見せが終わると、自分の流れに帰って、生前山笠に功績のあった故人を供養する。これを「追善山」と言う。
- 7月14日 10日と同じ流れ昇きを行う。
- 7月15日 7月1日に始まった祭りも、この15日早朝の「追い山」でフィナーレとなる。午前1時過ぎから、櫛田神社前の道路には次々と昇き山が据えられる。夜明けが近づくにつれて昇き手も見物客も増え足の踏み場もないようになる。早暁の午前4時59分ドーンと響く大太鼓の合図で山留め竿（出発点）がさっと上り、一番山が怒涛の勢いで櫛田神社の境内へ、清道を半周すると昇き山を神社の能舞台に向けて止め、棧敷の観客達と一緒に「祝い目出度」の大合唱をした後、一気に街へ飛び出す。このタイム33秒前後を競い合う。この後5分おきに順次櫛田入りをし全部で7本の山が追い山コースを全力を出して疾走する。最後に番外として飾り山1本が櫛田神社の清道入りのみをする。今まで提灯の灯がくっきり浮かび上がっていた夜のとぼりが東の空から白みかける



のもこの頃である。重さ1トンの昇き山が5kmのコースを、朝の静けさを破る「オイサ、オイサ」の掛け声と、沿道からの勢い水を浴びてまっしぐらに都心を走り抜けて行く。このタイム33分から35分と言う驚くべき速さである。法被に浴びた勢い水がほてった体に心地よく、そして体の熱で湯気を立て始める。1番になっても何の賞品もなく、唯隣の山から勝った、負けたと言う荣誉と悔しさだけの生き甲斐、心意気である。

この祭りが、都会の住民が忘れかけた連帯感を息づかせる。最近、青少年による犯罪が発生し、国民の多くが心を痛めているところであるが、若者達は町の祭りにもっと参加し、汗を流し大いに青春を燃やすべきである。

7本の昇き山と、1本の飾り山が櫛田神社の清道を走り出た後は、境内の能舞台で鎮めの舞が行われている。

最後に、山笠運営の組織について、お話ししたいと思う。私の所属する大黒流は12の町で形成しており、参加者は1000人近い数である（7流全体7000人以上）。各町は一般参加者（小学生以下・役員OB含む）と町内役員で構成され若手（中学生以上）⇒赤手拭（実労部隊）⇒取締（町代表責任者）⇒町総代（町内会長）の順で上下関係を明白にしており、頭に巻いている手拭の色で識別されている。

中学生になると、町総代及び取締にお酒を持って挨拶に伺い若手入りをお願いに行く。いわゆる昔でいう元服の儀式である。これで大人として山の男として認められるわけである。そして彼らは、憧れの赤手拭になるため5年以上、山の修行が始まる。赤手拭とは20代から30代の実労部隊である。

又肩からかけるタスキの色で役割分担を決めている。①赤・白＝台上り（山に乗る人）②黄・白＝前さばき（憲兵ともいい、山が進む道をあけさせる人）

③水色・白＝鼻取り（山の棒の四隅の縄を握って方向を定めていく人）④緑・白＝交通整理 等々で歴史の仕来りである。

祭りのない土地はない。そこには優れた風土性がしみ出た祭りの特色があるであろう。「山笠があるけん、博多たい」とは、よく言われるフレーズだが、同感である。ちなみに我が家では、親子孫三代打ち揃っての参加である。

山が終わると、梅雨も明け、博多の街には本格的な夏が来る。